

山田洋次監督作品



もう息子には会えないと、思っていました。



母と暮せば  
haha to kuraseba

松竹120周年記念映画

吉永小百合 二宮和也  
黒木華 浅野忠信 加藤健一

監督/山田洋次


脚本/山田洋次・平松恵美子

企画/井上麻矢(こまつ座) プロデューサー/榎望

撮影/近森真史 美術/出川三男 照明/渡邊孝一 編集/石井巖 録音/岸田和美

製作/「母と暮せば」製作委員会 制作・配給/松竹株式会社 題字/100%ORANGE

12月12日(土)ロードショー



「浩二、浩二、どうしたの？  
あなたは悲しくなるといなくなるのね」

終戦70年——。

山田洋次監督が作家・井上ひさしさんに捧げて  
長崎を舞台に描く『母と暮せば』、ついに映画化。

「50年以上の間、たくさんの映画を作ってきましたが、終戦70年という年にこの企画に巡り合ったことに幸運な縁と運命すら感じています。井上ひさしさんが、『父と暮せば』と対になる作品を『母と暮せば』という題で長崎を舞台につくりたいと言われていたことを知り、それならば私が形にしたいと考え、泉下の井上さんと語り合うような思いで脚本を書きました。生涯で一番大事な作品をつくろうという思いでこの映画の製作にのぞみます。」

山田洋次

やさしくて、悲しい。

山田洋次監督初のファンタジー。

1948年8月9日。長崎で助産婦をして暮らす伸子の前に、3年前に原爆で亡くしたはずの息子・浩二がひょっこり現れる。

「母さんは諦めが悪いからなかなか出てこれなかったんだよ。」

その日から、浩二は時々伸子の前に現れるようになる。ふたりはたくさんのお話をしますが、一番の関心は浩二の恋人・町子のことだった。

「いつかあの子の幸せも考えなきゃね」。ふたりの時間は、奇妙だったけれど、楽しかった。その幸せは永遠に続くようにみえた——。

母親・伸子役に吉永小百合、息子の浩二役に二宮和也、浩二の恋人・町子役には黒木華という理想的なキャスティングで山田洋次監督が初めてつくる、やさしく泣けるファンタジー作品が誕生します。

[hahatokuraseba.jp](http://hahatokuraseba.jp) | [facebook.com/hahatokuraseba](https://www.facebook.com/hahatokuraseba) | [@hahato\\_kuraseba](https://twitter.com/hahato_kuraseba) #母と暮せば

12月12日(土)全国ロードショー

冬は泣いて、春は笑う。

山田洋次監督作品2本連続公開！  
『家族はつらいよ』2016.3.12(土)